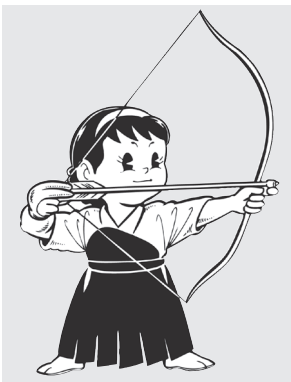


奥州市における中学校武道必修化に向けた取組

奥州市教育委員会



平成24年度から完全実施される中学校新学習指導要領では、保健体育科で武道必修化が盛り込まれている。

岩手県の奥州市教育委員会では、平成21年度より文部科学省の「地域スポーツ人材を活用した運動部活動等推進事業」を活用し、地域の武道の指導者の協力を得て、武道の授業の円滑な実施に資する取組を行っている。

1 奥州市の概要と弓道の歴史

奥州市は、岩手県の内陸南部に位置し、平成18年に水沢市、江刺市、前沢町、胆沢町、衣川村の5市町村が合併して誕生した。人口

この地域での弓道の歴史は古く、旧水沢市においては、昭和4年頃、弓道愛好者10名ほどが市内にある駒形神社の境内に集い、土盛りをした程度で的を立てたのが始まりである。当時は、射場に屋根がなかったため、雨天の日は練習もままならなかった。その後、

昭和7年、「駒形弓道会」が結成され、さらには戦後の昭和31年、水沢中学校に弓道部が組織された。水沢中学校では駒形弓道会の支援を受け、部活動が活発に行われるようになった。

戦前から愛好者によって弓道が盛んに行われていた。昭和30年、庁舎の移転に伴い会員数も増え、他弓道会との交流射会や、県内諸大会にも参加してすばらしい成績を挙げるなど活動が活発であった。

え、各種大会及び記念射会に参加するとともに、スポーツ教室等を開講し、射技のみならず弓道としての心の修養にも力を入れ、精神的な面の修養と礼儀の指導も大切にしており、弓道人口の拡大に力

を入れている。これから紹介するのは、地域の弓道の指導者の協力を得て、保健体育の授業として武道を取り入れている奥州市立水沢中学校の実践である。

かりやすい、深く追究できる」内容を考えた。資料として10時間目の授業例を紹介する。

2 奥州市立水沢中学校の実践

(1) 生徒の実態

現在、会員数は水沢・江刺両弓道協会を合わせると50名を超

対象生徒は奥州市立水沢中学校2学年女子96名（A B組38名・C組20名・D E組38名）である。このうち経験者は、中学生対象のジュニア講習会に参加したことのある陸上部員6名と家族に教わった2名、いずれも初心者レベルである。また、弓道に興味がある生徒は76%であった。さらに、生徒の新体力テスト結果から見た運動に対する意識（有能感）を調査した結果、全体の得意意識は44%、苦手意識は56%とほぼ同率であった。そのうち、体力の高い（A B評価）生徒の中にも苦手意識を

もつ生徒が29%いることが分かった。

(2) 授業の流れ

1時間ごとの授業内容と単元の流れと生徒の様子は、資料1・2の通りである。授業の充実を図るため、外部指導員として毎時間3〜4人ご支援いただいた。

(3) 課題解決学習の充実

昨年度より3時間、時数を増やしたことで的前練習（まへしゅぎ）に入ってから課題解決学習を充実させることができた。指導したい内容は多々あるが、生徒が1時間に学ぶことのできる内容は限られている。課題提示は「ポイントを絞って、わ

①学び合う場の充実
的を4つ設置し、1つの的に外部指導員1人がつき個別指導をする。その間、待機生徒は32名となる。その運動量を確保するため、図2「学び合う場の設定の工夫」の通り、場を設定した。課題解決に仲間と取り組む中で「できた」という実感を高める場にできるよう、②を明確にして学び合いの場に生かす工夫をした。

②課題解決の見通しをもつ

生徒の学び合いを支えるのが「考える視点」である。そのため、図3「課題解決を見通す工夫」として、生徒に考える視点を与え、学び合いの場を充実させた。

(4) 生徒の変容

①課題解決の見通しをもつ「わかる」

授業前半は初めて学ぶ内容についていくので精一杯であったが、



文化祭のオープニングセレモニー



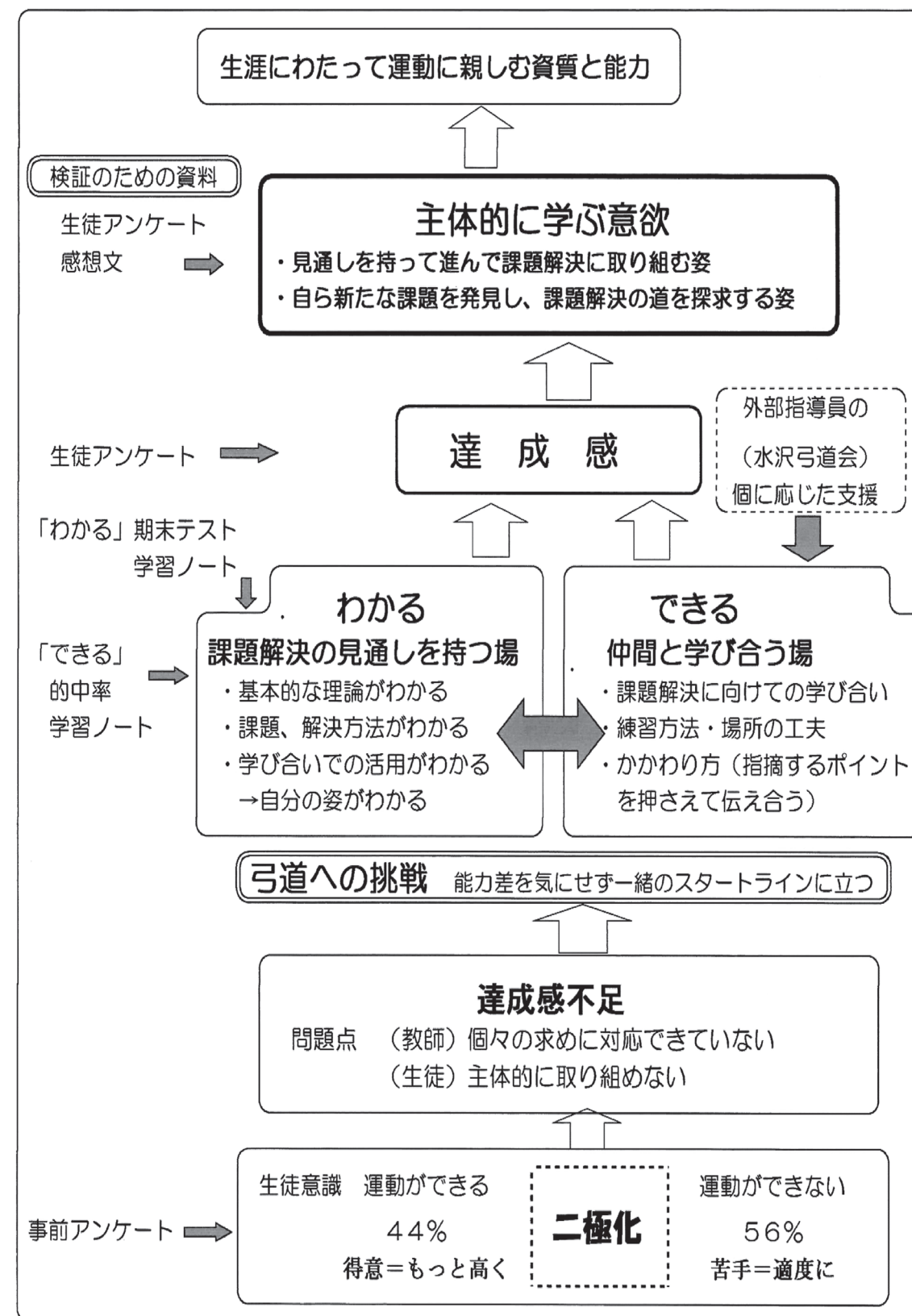
姉妹都市であるオーストラリア・シェパトン市の生徒を受け入れての授業の様子

射法八節が弓道の基本として定着してくと、その理論（主に会離れ、残心について）を理解し、課題解決への見通しを持てるようになった。的前練習を重ねていくうちに「ねらった通りの場所に矢が飛ばないのはなぜだろう」という疑問をもち始めた。そこで前述したとおり考える視点を与えたところ、仲間同士で指摘し合う言葉が増えてきた。期末テストにおいても思考判断力を問う出題に対しての正答率は95%と高いものとなった。

【資料1】 「課題解決の見通しを持つ場」「仲間との学び合う場」の充実を図る学習指導試案

段階	学習活動	指導上の留意点
つかむ	1. 準備（練習場設営・道具準備） 2. 準備体操 3. 前時までの学習の確認（学習の基本になる射法八節練習） 4. 本時の学習課題の把握「課題解決の見通しを持つ場」	・弓道で使う筋を意識した運動を行う。 体幹トレーニングを行い、体の軸を意識させるとともに、体力向上を図る。 ・射法八節のポイントと理論を理解させるための働きかけをする。 ・学習課題を提示し、その解決に向けた見通しを理論的に考えることができるよう支援する。 「わかる」
たしかめる	5. 課題解決に取り組む (1) 全体一斉練習 ・本時の課題と練習のポイント確認 (2) グループ学習 「仲間と学び合う場」4人グループ ・互いの練習を見て、教え合う。	・新たに指導すべき内容が多いため、動き方や練習の方法などを実際に行い、確認する。ここでさらに課題解決に向けて見通しが深められるように指導する。 ・学び合う場を充実させるために、練習方法や場所を数種類設ける。毎回のポイントを最小限に絞り、生徒間の学び合いにより、「わかった」「できた」達成感を持たせる。
まとめ	6. 整理運動 7. 振り返り (1) 学習カードの記入 (2) 話し合い グループ学習の成果 8. 学習のまとめ 9. 挨拶・片付け	・ストレッチを行わせる。 ・自己の振り返りを行わせるとともに、仲間との学び合いで得たことを確認し合う場をつくる。その中で、自分では気づかなかったことを発見したり、「できてたよ」の声がけなどで次への意欲を喚起させたい。

【図1】 授業の基本構想





的前練習

から、おおむね満足（評価B）とするラインを40点満点中18点以上と低めに設定した。その結果、91%の生徒が達成できた。そのうち、A評価（28点）の生徒は51%であった。アンケート結果より「できたという喜びを感じることでできましたか？」では、100%中何%であったかを調査した。結果はA（75%以上）が62%、B（51%以上）が28%であり、90%以上の生徒が達成感を味わうことができた。運動に対する苦手意識があ

る生徒にも達成感をもたせることができたと考えられる。ウ、生徒の感想より生徒の「できた」実感の多くは的中と関わっている。しかし、どの生徒も中的の喜びだけではなく、そこから学んだことを記入している。その内容を紹介したい。「みんなはすぐに一人での向かっていただけ、わたしは怖くて一人ではできませんでした。でも最後の授業では一人で引くことができたし、3本とも全部9点に入ったときは嬉しかったです。弓道の授業をやっていて、挑戦することの大切さと最後まで諦めないことを学びました」

「弓道はただカッコイイだけではなく、自分自身と真剣に向き合える素敵な武道だと思いました。自分自身の心に浮ついた気持ちがあれば、それが矢にも現れると思います。そんな気持ちを隠しきれない分、意識を集中して精神を統一できるのだと思いました」

「わたしは弓道がとても好きです。弓道の授業は、毎時間の礼をしたときに新しい気持ちになりま

す。次にやれるときがあつたら、私はどんな気持ちで臨めるか楽しみです」

（5）体育授業としての弓道

今回の研究を通して実感したことは、「弓道は生徒自身が自ら学びを深める教材である」ということである。つまり生徒の主体的学

3 おわりに

水沢中学校では、授業の中に弓道を取り入れ、生徒の達成感や学ぶ意欲を大切にしながら実践に取り組んできたが、必修化に向けて環境設備の充実や指導体制面での課題が明らかになった。また、ほとんどが初心者である生徒を指導する場合、安全性と指導内容の充実を考えると、生徒数に応じて指導者も増やす必要があることも分

かった。弓道部がある学校であれば生徒間の学び合いも充実し、教師が一人でも指導できるが、弓道部がない現状では、教師一人で指導できる人数に限りがある。

今後は、地域の人材活用等、水沢中学校の実践を通して得られた成果と課題を踏まえながら、体育の授業への円滑な導入を進めていきたい。

②仲間と学び合う場「できる」学び合う場の設定を工夫し、練習方法の種類を増やすなどの工夫をしたことで、学び合いの場が充実し、個々の「できた」という実感が高まってきた。「できた」という実感は次の通りである。

- ・結果を伴うものとしての実感
- ・矢が的の中心に近くなっている
- ・自分の感覚での実感
- ・一人で引けた、気持ちよく離れたなど
- ・仲間や指導者からの賞賛

「きれいな一文字になっていたよ」

この「できた」という実感を数多くもたせることで生徒の達成感が深まり、主体的に学ぶ力が高まってきたと考える。

次に、的中率、アンケート及び生徒の感想から、生徒の変容を検証した。

ア、的中率について

的中の中にこだわりすぎずに「正射必中」――まずは正しく引くという意識させたいという視点

【資料2】 授業の実際

		学習内容	課題・学び合う場	生徒の様子
1	オリエンテーション	学習の見通しを持つ。 弓道という武道について知る。	「弓道はどのような武道なのだろうか」	模範演技を見学し、弓道のイメージをつかんだ。グループ編成では硬い表情。
2	射法八節基礎	紐を使った練習	「射法八節を学ぼう」それぞれの道具を使用して仲間と練習	課題をつかむが、グループ活動に硬さが残る。形をつくるのに精一杯。
3		ゴム弓練習		
4		索引き練習		
5	弓具の取り扱い・矢番え	ゆがけの付け方	「正しい矢番え動作を学ぼう」矢を使つての練習は指導者の前でのみ。（危険防止）生徒同士の練習は弓だけで行う。	矢番え動作を円滑に行えるようにならないと矢を放つことができないため、マスターしようと意欲的に取り組んだ。
6		矢番え動作を知る		
7		矢番え・的前練習		
8	正しい取りかけ・離れ	取り懸け練習	「正しい取りかけを学ぼう」「正しい離れの動作を学ぼう」場の設定を工夫した。	射法八節への理解が深まり、良い動きが分かるようになった。仲間へのアドバイスも多くなってきた。
9		ねらいを知る		
10		正しい離れの動作		
11				
12	競技会	4射・得点制	「協力して競技会を行おう」	協力して競技会を運営した。的中率の向上に喜びの声が多く挙がるようになった。
13	納射	納射を行う	「最高の一射を引こう」	静寂な雰囲気をつくり、仲間を尊重する態度で納射会を実施できた。



12時間目の授業の競技会の打合せ

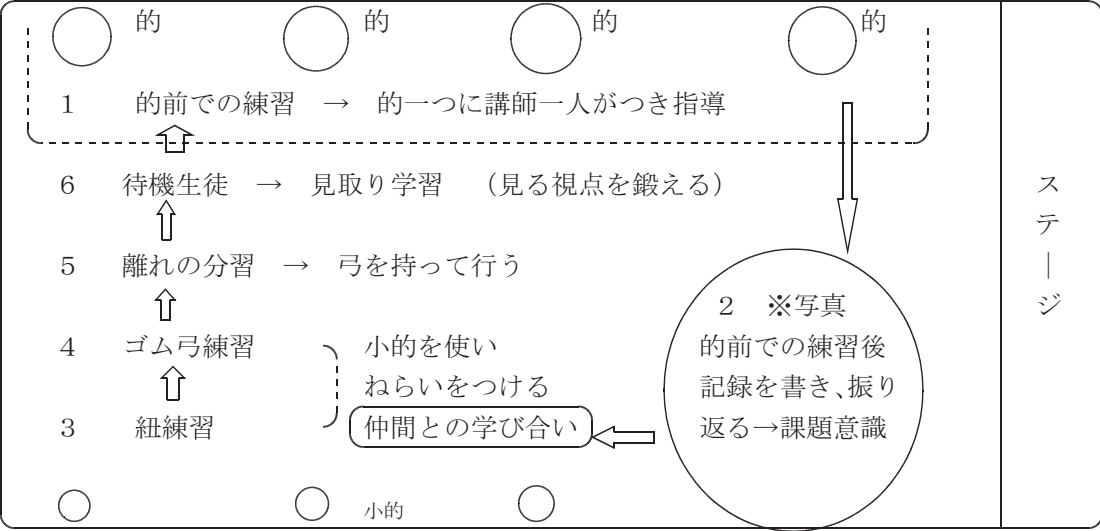


体幹トレーニングの様子

【資料3】 「正しい離れの動作を学ぼう」学習指導案

	学習内容	生徒の学習内容	教師の支援	備 考
導入 15分	1. 集合整列 準備体操 2. 徒手練習 3. 挨拶 4. 出欠確認 5. 本時の課題確認	・教科リーダー中心に、弓道で使う筋を意識して行う ・射法八節を紐で行う。会の状態を長く保ちトレーニング要素を入れる。 ・姿勢を正して、座礼を行う（的に向かって・互いに） ・本時の課題を把握する	・生徒の状態を観察、把握 ・自主的な活動にできるよう支援する ・静寂な雰囲気をつくる ・生徒の健康状態の把握 ・「正射必中」「三重十文字」を意識させ、正しい離れをイメージさせる	
正しい離れの動作を学ぼう				
展開 30分	6. グループ学習（離れの分習） 7. 的前練習	・左手の練習を行う ・右手の練習を行う 仲間の練習をみてアドバイスをする。 ・的に向かって練習する ①的前練習 ②記録を書く ③紐で練習（ペア） ④ゴム弓で練習（ペア） ⑤離れの分習 ⑥見取り稽古（的前待機） ①～⑥をローテーション	・講師は巡回し生徒の活動を支援する 課題解決への見通し 正しい「離れ」に近づけるために、指摘するポイントをつかむ。 （わかる）→学び合う場へ ・一つの的に一人講師がついて支援する。 ・教師は全体を観察し生徒の活動を支援する。 仲間との学び合い ・矢が的の中心に近づく ・自信を持って「離れ」ができる ・ほめられる（できる）	
まとめ 5分	8. 振り返り 9. 次時の予告・片付け解散	・「正しい離れの動作」について学んだことを体育ノートに記入する ・仲間へのアドバイスを記入する ・次時の確認をする ・協力して、全員で行う	・生徒の学びを確認する ・全員が動けるよう指示を出す	

【図2】 「学び合う場」の設定の工夫



※ 2 的前練習後の振り返り風景
 的中した場所と得点を記入する。
 先生からの助言を書く。
 「新たな課題を見つけ、解決方法を考える」
 「仲間と学び合う場」へ移動



【図3】 課題解決を見通す工夫

射法八節 六「会」 弓をいっぱい引いた状態

- ・三重十文字 体の縦軸と①両肩のライン
- ②腰のライン
- ③足踏みのライン

これらがねじれなく十文字に保たれている状態

1 この理論を理解し、仲間をみる視点を持つ
 2 自分では見えない部分を仲間に教えてもらい、体感で理解していく

射法八節 七「離れ」 八「残心(身)」

両腕が床と平行に一文字の形で離れている

残心でチェックできるが、離れの瞬間を捉えることは自分ではできないため、仲間が見る。
 「正しい離れ」を理解し、それをもとに学び合う